

国立国語研究所学術情報リポジトリ

児童・生徒の作文で使用されている自称詞について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): Written Composition Corpus of Japanese Elementary and Junior High School Students 作成者: 加藤, 恵梨 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003500

児童・生徒の作文で使用されている自称詞について

加藤 恵梨 (大手前大学 現代社会学部) †

Analysis of Personal Pronouns used in Compositions Written by Elementary and Junior High School Students

Eri Kato (Otemae University)

要旨

本研究は『児童・生徒作文コーパス』を用い、小学1年生から中学3年生までの男女児童・生徒が作文においてどのような自称詞を用いているのかを調査した。その結果、女子児童・生徒は「わたし・私」のみを用いているのに対し、男子児童・生徒は「ぼく・僕」「わたし・私」「俺」「われ・我・我々」など、複数の自称詞を用いていることが分かった。また、男子生徒の作文の中には、一つの作文内で複数の自称詞を使い分けることで、思いや気持ちなどを効果的に表現しているものがあることなどを明らかにした。

1. はじめに

本研究は、児童・生徒が作文においてどのような自称詞を用いているのかを明らかにすることを目的とする。宮城・今田 (2018) は、「子どもの作文能力は語彙の習得状況や、様々な日本語と接する機会の多寡、読書量、書きなれ等の要件が関って変化し、個人差も少なくないが、学年が進むにつれて段階的に発達していく。こうした言語発達の各段階において、どのような語彙や漢字が学習に適しているかを調べることは重要な研究課題である」と述べている。また、今田・宮城 (2020) は児童作文について、「児童が生活の中で使用している語彙を直接観察することは難しく、書き言葉に限定されるが観察可能な資料として児童作文の有用性は大きい」と指摘している。これらの記述から、児童・生徒の作文を資料とし、学年が進むにつれて段階的にどのように自称詞を習得していくのかを調べることは有益であると言える。

2. 国語科教科書での自称詞について

自称詞とは、話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念のことである (鈴木 1973)。自称詞は自我の発達を表すものの一つと考えられている (西川 2003)。児童・生徒の自称詞の使い方については、話しことばにおける先行研究は多くある (小林 2006、三枝 2010、佐竹 2018 など) が、書きことばについては管見の限り、あまり見られない。

児童・生徒は学校で自称詞についてどのように学んでいるのかであろうか。村田 (2018) は、小学1年生用国語科教科書に記述されている自称詞について、「『わたし』と『ぼく』は、一対のペアとなる性別語として登場し、『ぼく』は少年語で、『わたし』は少女語としての位置づけにあると言える。多くの場合、女兒と男児の絵がつき、話しことばを明示する吹き出しの中に入って現れている。一方、『ぼく』も『わたし』も包含する中立的な意味の『わたし』は、話しことばの吹き出しの中には現れず、単元名や本文のト書きの部分に出現している。児童は、文字だけでなく、教科書の挿絵、教室での教師の指導によって理解をしていくので、『女ことば』の『わたし』と、中立的な意味の『わたし』について、最初は区

† erikato@otemae.ac.jp

別ができなくても、学習過程で徐々に理解が進むのであろう。」と述べている。村田(2018)の記述から、小学1年生は教科書の記述を通して、女兒は「わたし」、男児は「ぼく」を使うということを学ぶと考えられる。また渡辺(2019)は、光村図書出版の小学校・中学校国語科教科書での自称詞の扱われ方について調査を行い、小学校の教科書は、男は「ぼく・僕」、女は「わたし・私」を使用している場面が多々見られるため、「学習者である児童はそれが一般的で、そうでなくてはならないという意識を強く持つと推察される」と述べている。加えて渡辺(2019)は、中学校の教科書では男性の「わたし・私」使用率が極めて高くなることを指摘している。さらに、調査結果をもとに「自称詞の選択は自分の立場や印象形成に大きな影響を与える。しかしながら、小学校・中学校を通して国語科教科書に自称詞に着目した単元や表記は、1つもない」と指摘している。

村田(2018)と渡辺(2019)の記述から、小学1年時に女兒は「わたし」を、男児は「ぼく」を使用することを学び、中学校に入ると、男子生徒も「わたし・私」の使用を学ぶということが分かる。実際に作文において、児童・生徒は自称詞をどのように使用しているのだろうか。以下では、『児童・生徒作文コーパス』を用い、自称詞の調査・分析を行う。

3. 『児童・生徒作文コーパス』について

宮城・今田(2018)に基づき、本研究で調査資料とする『児童・生徒作文コーパス』について説明する。『児童・生徒作文コーパス』は、国立大学付属小学校と中学校を調査協力校として、4校(小学校2校、中学校2校)9学年(小学1年～中学3年)の全児童・生徒に学年横断的に作文課題をかし(作成時間は小学校40分、中学校45分)、収集して電子化した資料である。調査は国語の時間を利用して、春頃(6月)と秋冬頃(12月頃)実施し、それぞれの題は、春は「ゆめ(夢)」、秋冬は「ぼくの／わたしのがんばったこと」である。「ゆめ」等の課題(タイトル)のみを板書で提示する形式で実施し、教科書や辞書の披見を認めずに執筆させた。教師による事前指導は一切行っていない。また、電子化にあたっては、誤字脱字等も修正せず原文のまま収録したものである。このように、『児童・生徒作文コーパス』は、調査時の条件を統一した作文コーパスで、児童らの作文の実態を反映している。

本研究では、2016年度に実施した「ゆめ」をテーマとして書かれた作文(以下、「ゆめ」作文と呼ぶ)と「がんばったこと」をテーマとして書かれた作文(以下、「がんばったこと」作文と呼ぶ)について、人手修正済みの形態論情報を付与したデータを使用した¹。今田(2020)に従い、表1に2016年度版の作文数、段落数、文数、文節数、語数、文字数を示し、表2に学年別の作文数を示す。なお、小学校は1学年2クラス、中学校は1学年4クラスである。

表1 データの概要

作文テーマ	作文数	段落数	文節数	語数	文字数
ゆめ	875	11,043	86,444	234,801	372,860
がんばったこと	849	12,083	95,015	263,114	422,743

表2 学年別の作文数

作文テーマ	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
ゆめ	64	70	67	69	69	75	158	155	148
がんばったこと	66	65	65	68	67	74	148	150	146

¹ 今田(2020)による。2020年12月時点の版を使用する。

4. 分析

4.1 男子児童・生徒が使用する自称詞について

はじめに、男子児童・生徒がどのような自称詞を用いているかを調査する。「ゆめ」作文については表3、「がんばったこと」作文については表4のような結果が得られた。なお、他者の発言を引用しているものについてはカウントしていない²。

表3 「ゆめ」作文における男子の自称詞の使用数

	小1 34名	小2 35名	小3 32名	小4 34名	小5 34名	小6 37名	中1 94名	中2 90名	中3 72名
ぼく	49	83 ³	105	97	92	95	163	23	11
僕	0	0	2	7	0	6	138	159	83
私	0	0	0	0	0	0	98	185	116
俺	0	0	0	0	0	0	1	0	2
われ	0	0	0	0	0	0	0	1	0
我々	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	49	83	107	104	92	101	400	369	213

表4 「がんばったこと」作文における男子の自称詞の使用数

	小1 34名	小2 34名	小3 33名	小4 33名	小5 33名	小6 35名	中1 87名	中2 90名	中3 74名
ぼく	49	82 ⁴	107	97 ⁵	88	77	34	8	0
僕	0	0	0	2	9	3	81	66	110
私	0	0	0	0	0	0	207	309	209
わたし	0	0	0	0	0	0	0	1	1
俺	0	0	0	0	0	0	1	1	1
我	0	0	0	0	0	0	0	4	0
合計	49	82	107	99	97	80	323	389	321

まず、表3の「ゆめ」作文における男子の自称詞の使用数を見る。小学1年生から6年生の男子児童は「ぼく・僕」という自称詞のみを使用している。なお、小学1年生と2年生はひらがな表記の「ぼく」のみの使用であるが、小学3年生から漢字表記の「僕」の使用も見られる。中学1年生になると、「ぼく・僕」に加え、「私」の使用が見られる。さらに、中学生は「俺」「われ」「我々」という自称詞も使用していることが分かる。

続いて表4の「がんばったこと」作文における男子の自称詞の使用数を見ると、「ゆめ」作文と大きな違いはない。小学生と中学生とでは、使用する自称詞が異なっている。中学1

² 本研究では「自分」については考察対象外とした。「自分」の調査については今後の課題とする。

³ 「ぼく」という誤表記1例を含む。

⁴ 「ぼく」という誤表記1例を含む。

⁵ 「ほく」という誤表記1例を含む。

年生では「ぼく・僕」の使用も多く見られるが、「私」の使用が急増し、中学1年生から3年生で最も多く使用されている自称詞は「私」である。その一方で、中学2年生以降はひらがな表記の「ぼく」はほとんど使用されなくなっている。また、「ぼく・僕」「わたし・私」の使用だけではなく、「俺」「我」の使用も見られる。

さらに、中学1年生から3年生の男子生徒の作文の中には、次の表5と表6のように、一つの作文内に異なる自称詞を用いているものも見られる。表5は「ゆめ」作文、表6は「がんばったこと」作文についての結果である。

表5 「ゆめ」作文における、一つの作文内に複数の自称詞を用いているもの

	学年	自称詞の使用回数	使用した自称詞の内訳
1	中学1年	3回	ぼく(2回)、私(1回)
2	中学1年	3回	ぼく(1回)、私(2回)
3	中学1年	4回	ぼく(3回)、私(1回)
4	中学1年	4回	僕(3回)、俺(1回)
5	中学2年	3回	ぼく(2回)、われ(1回)
6	中学2年	4回	ぼく(3回)、私(1回)
7	中学2年	5回	私(4回)、我々(1回)
8	中学2年	6回	僕(2回)、私(4回)
9	中学2年	8回	僕(1回)、私(7回)
10	中学2年	8回	僕(1回)、私(7回)
11	中学2年	9回	僕(1回)、私(8回)
12	中学2年	11回	僕(3回)、私(8回)
13	中学2年	11回	僕(1回)、私(10回)
14	中学2年	14回	僕(1回)、私(13回)
15	中学3年	3回	僕(2回)、俺(1回)
16	中学3年	3回	僕(1回)、私(2回)
17	中学3年	3回	僕(1回)、私(2回)
18	中学3年	5回	俺(1回)、私(4回)
19	中学3年	5回	僕(2回)、私(3回)
20	中学3年	7回	私(6回)、我々(1回)
21	中学3年	10回	ぼく(2回)、私(8回)

表5のように、「ゆめ」作文では中学1年生4名、中学2年生10名、中学3年生7名が一つの作文内に複数の自称詞を用いている。最も多いのは「ぼく・僕」と「私」の同時使用であり、21名中15名が用いている。

表6 「がんばったこと」作文における、一つの作文内に複数の自称詞を用いているもの

	学年	自称詞の使用回数	使用した自称詞の内訳
1	中学1年	3回	ぼく(1回)、私(2回)
2	中学1年	3回	僕(2回)、私(1回)
3	中学1年	5回	ぼく(1回)、私(4回)
4	中学1年	5回	僕(4回)、俺(1回)
5	中学1年	5回	僕(4回)、私(1回)
6	中学1年	8回	僕(7回)、私(1回)
7	中学1年	6回	ぼく(4回)、私(2回)
8	中学1年	6回	ぼく(4回)、私(2回)

9	中学2年	3回	僕(2回)、私(1回)
10	中学2年	4回	僕(2回)、私(2回)
11	中学2年	4回	僕(2回)、私(2回)
12	中学2年	6回	僕(1回)、私(5回)
13	中学2年	8回	ぼく(3回)、僕(1回)、私(4回)
14	中学2年	10回	僕(3回)、私(7回)
15	中学2年	15回	僕(4回)、私(11回)
16	中学2年	15回	僕(11回)、私(4回)
17	中学3年	2回	僕(1回)、私(1回)
18	中学3年	5回	僕(1回)、私(4回)
19	中学3年	7回	僕(6回)、俺(1回)

表6のように、「がんばったこと」作文では中学1年生8名、中学2年生8名、中学3年生3名が一つの作文内に複数の自称詞を用いている。「がんばったこと」作文においても多いのは「ぼく・僕」と「私」の同時使用であり、19名中17名が用いている。

上述のように、「ゆめ」作文、「がんばったこと」作文ともに、中学2年生が最も多く一つの作文内で複数の自称詞を用いている。しかし、中学3年生になると数が減り、一つの自称詞を用いて作文を書いていることが分かる。では、具体的にどのように一つの作文内に複数の自称詞を用いているのであろうか。以下で実例を見る。

- (1) 私の夢はテレビ局で働くことです。理由は二つあります。

一つ目は、人の役に立つことができるからです。(後略)

二つ目は、協力できるからです。取材する人や制作する人など、一人一人のする事は違うけれど、だれか一人でも欠けてしまえば、番組はできなくなります。この仕事は出演者とは違って、裏で働くので、番組には出ないけれど、それぞれ、とても大切なので、ぼくもその仕事に関わってみたいです。

テレビ局で仕事をする人は、決して有名ではないけれど、みんなの役に立てるものです。ぼくは、この仕事を目指して、がんばりたいと思います。

(「ゆめ」作文、中学1年、男子)

(1)は中学1年生の「ゆめ」作文である。「私の夢は」で文章を書き始めているが、文章の終わりのほうでは「ぼく」が使われている。「ぼくもその仕事に関わってみたいです」「ぼくは、この仕事を目指して、がんばりたいと思います」のように、仕事に関する自分の希望を述べる際には、「私」ではなく「ぼく」が用いられている。

- (2) 私の夢は二つで今、迷っています。今までもけっこうコロコロと変わってきました。

一つ目は、文房具デザイナーです。(後略)

二つ目は弁護士です。ドラマとかでよく、弁護士や検事ものがあるからこの夢もそれからです。依らい人を身事守ったりするところもかっこいいのですが、ただ単に法律とかにも興味があります。でも、その資格を取るためには、ものすごい量勉強して法律とかを暗記しないといけないと聞いたのでぼくにできるか、かな⁶心配です。でも、それを乗り越えてこそなれるものだと私は思うので、あきらめずにがんばっていきます。(「ゆめ」作文、中学1年、男子)

- (3) (前略) 私が薬剤師になりたいという理由の二つ目、それは人を助けたいということです。「医者でもいいと思うよ。」という言葉は誰もが私に言います。しかし、僕は

6 「かな」は「かなり」の誤表記であると考えられる。

血を見たり、人を傷つけることは大の苦手です。

(「ゆめ」作文、中学2年、男子)

- (4) 私の最近見た夢は、タブレットが壊れる夢だ。確かに、私は最近タブレットを寝る前にもよく使っており、質のよい睡眠がとれているとはいえなかった。(中略)しかし、僕は少し恐ろしくもなった。自分の脳はそれを望んでいるのではないかと。心の奥そこでは気付いているのだ。私はタブレットの使用時間を少し改めないといけないようだ。(「ゆめ」作文、中学3年、男子)

(2)も中学1年生男子の「ゆめ」作文である。「ぼくにできるか、心配です」のように、自身の心情を表すときには「ぼく」が用いられているが、それ以外は読み手の存在を意識し、「私」というフォーマルな自称詞を用いている。続いて(3)は中学2年生の「ゆめ」作文である。(3)も基本的には「私」で書き進められているが、苦手なことを表現するときには、「僕」が使われている。このように書くことで、本当に苦手なんだという気持ちがよく伝わってくるように思われる。さらに(4)は中学3年生の「ゆめ」作文である。「僕は少し恐ろしくもなった」とあるように、自分の感情を述べるといった主観的な記述の時には、「僕」を用いている。それに対して、「私は最近タブレットを寝る前にもよく使っており」や、「私はタブレットの使用時間を少し改めないといけないようだ」のように、自分自身について客観的に述べるときには「私」を使用している。

- (5) 僕の夢は、まだあまりきまっていません。(後略)

最近、弁護士、検察官という職に興味があります。自分で言うのもどう思うのですが、口はみんなより強い自信もあるし、人を守ったり、追及したりすることで、人を助けることができるのではないかと思ったからです。しかし、弁護士、検察官になれるとは本当は自分でも思っていません。まず、頭の悪い僕が東大生でも受かるかぐらいの司法試験に合格できるはずもないだろうし、そんな職になれる人もほんの数人だと思うからです。それでも、僕はあきらめたくありません。(中略)家へ帰ると、「将来どうしよう」「俺はこのままでやっていけるのか」となやむこともときどきあります。(「ゆめ」作文、中学1年、男子)

- (6) 僕のがんばりたいことは、部活です。

僕は卓球部に入っていて、一応しっかり毎日練習にはげんでいます。今は、「みんな練習遅刻しているから、別に俺も少しぐらい遅れたっていいかな」という気持ちがあって、たまに朝の練習を遅刻してしまうことがあります。

(「がんばったこと」作文、中学1年、男子)

(5)と(6)は一つの作文の中に「僕」と「俺」を使っている例である。(5)は中学1年生の「ゆめ」作文である。「僕」という自称詞を使って書き進められているが、自身が普段から抱いている感情をそのまま表す際、普段用いているのであろう「俺」という自称詞を使い、「俺はこのままでやっていけるのか」と記述している。続いて(6)は中学1年生の「がんばったこと」作文である。(6)も(5)と同様、書き手の心情については今まで用いていた「僕」ではなく、「俺」を用い、「別に俺も少しぐらい遅れたっていいかな」と記述している。

- (7) 私は、将来の夢の選択肢に、エンジニアという職を考えている。(中略)家業を継ぐという考えも昔のように通じぬ世の中になったものだ。仕事を欠いては社会が全く成立しない、というのは全くその通りで、現に今、自分が毎日を送る場である学校というシステムにだって勿論、仕事が組み込まれている。憲法上で保証された権利と義務によって我々の生活は成り立っている今、民間の生活価値が質を上げ、先に述べた

ような多様性も生まれてきた。(「ゆめ」作文、中学2年、男子)

- (8) 私の将来の夢は、人並みの時期に結婚し、国政に携わる職に就き、日本を裏から変えていくことだ。しかし、私は人間性に問題があり、結婚できそうにない。(中略)そして、リア充共を絶滅させるために、人一倍勉強に励み、法律を操ることができる役職に就きたい。そして、我々にとって害悪の権化であるリア充を消滅させる法律を可決させたい。(「ゆめ」作文、中学3年、男子)

(7)は中学2年生の「ゆめ」作文である。「私」を用いて書き進められているが、「憲法上で保証された権利と義務によって我々の生活は成り立っている今」のように、客観的に自分たちを示すときには「我々」を用いている。続いて(8)は中学3年生の「ゆめ」作文である。(8)も(7)と同様に基本的には「私」で書き進められているが、「我々にとって害悪の権化であるリア充を消滅させる法律を可決させたい」のように、法律に関する部分では、「我々」が使われている。

- (9) ぼくの夢は夢を探すことです。これはただの「夢がない」ということではありません。われにとっては「夢がない」ということは希望を捨てた人が使う言葉だと思えます。なので、ぼくは希望を持って、夢を探している最中だということです。(「ゆめ」作文、中学2年、男子)

(9)は中学2年生の「ゆめ」作文である。「ぼく」という自称詞を使って書いているが、自分自身がということを強調するときには「われ」を用いていると考えられる。

- (10) 僕の将来の夢はお笑い芸人である。理由はお笑い芸人をして、お金がたくさんもらえるし、有名な芸人としゃべることができてとても楽しいから。僕はいつもテレビでお笑いとかを見る。よく思うのが、お笑い芸人はよくあんなに多くの人を笑わせることができるな一だ。いつも見ていて感心してる。だから俺はお笑い芸人になるぞ。(「ゆめ」作文、中学3年、男子)

「僕」と「私」の使用だけではなく、(10)のように、「僕」と「俺」が使用された例も見られる。(10)は中学3年生の「ゆめ」作文である。「僕」を使って書き進められているが、最後の決意の表明「俺はお笑い芸人になるぞ」のところでは「俺」が使われている。

以上のように、一つの作文内に複数の自称詞を用いている場合、基本的には「私」というフォーマルな表現が使われているが、自身の心情を表すときには児童・生徒が普段話しことばで使っている自称詞（「僕」や「俺」など）を用いている。そのように自称詞を使い分けて記述することで、思いや気持ちなどを効果的に表現していると考えられる。

4.2 女子児童・生徒が使用する自称詞について

次に、女子児童・生徒がどのような自称詞を用いているかを調査する。「ゆめ」作文については表7のような結果が、「がんばったこと」作文については表8のような結果が得られた。

表7 「ゆめ」作文における女子の自称詞の使用数

	小1 31名	小2 35名	小3 32名	小4 35名	小5 35名	小6 36名	中1 64名	中2 70名	中3 76名
わたし	65	106	109 ⁷	85	45	2	3	0	2
私	0	0	22	71	77	174	343	427	327
合計	65	106	131	156	122	176	346	427	329

表8 「がんばったこと」作文における女子の自称詞の使用数

	小1 32名	小2 31名	小3 33名	小4 35名	小5 34名	小6 39名	中1 61名	中2 68名	中3 72名
わたし	63	63	89	72	73	4	1	0	3
私	0	14	31	68	56	131	320	470	344
合計	63	77	120	140	129	135	321	470	347

表7と表8から分かるように、女子児童・生徒は「わたし・私」のみを用いている。まず表7の「ゆめ」作文における女子の自称詞の使用数を見る。小学1年生と2年生はひらがな表記の「わたし」のみを用いているが、小学3年生から漢字表記の「私」が使われるようになり、小学5年生以降は「私」の使用のほうが多くなっている。また、中学2年生と3年生は「私」のみを用いている。続いて表8の「がんばったこと」作文における女子の自称詞の使用数を見る。「がんばったこと」作文では小学2年生から漢字表記の「私」が使われており、小学6年生以降は「私」の使用のほうが多くなっている。

また、次の例のように、一つの作文の中に「わたし」と「私」を同時に使っているものも見られた。

(11) 私が今年がんばりたいことは部活動です。

私は、コーラス部に所属して、毎日合唱練習をしています。入った理由は、「歌が好きだから」という単純な理由で、練習もきついとは思っていませんでした。しかし、部活動が始まると、何時間も歌ってばかりでかなりきつくておどろきました。でもおどろきと同時に、先輩方の歌を聞いて、「わたしもあんなふうに歌えるようになりたい」というあこがれの気持ちも感じました。それから一生けん命努力し、家でも練習するようになりました。すると、NHK学校音楽コンクールのオーディションに課題曲も自由曲も合格することができました。

(「がんばったこと」作文、中学1年、女子)

(11)は中学1年生の「がんばったこと」作文である。基本的には「私」を用いて書かれているが、あこがれの気持ちを表現するときには「わたしもあんなふうに歌えるようになりたい」のように、「わたし」を用いて書かれている。このことから、「私」と「わたし」の使い分けがされていると考えられる。

⁷ 「はたし」という誤表記1例を含む。

5. おわりに

本研究は『児童・生徒作文コーパス』を用い、小学1年生から中学3年生までの男女児童・生徒が作文においてどのような自称詞を用いているのかを調査した。その結果、女子児童・生徒は「わたし・私」のみを用いているのに対し、男子児童・生徒は「ぼく・僕」「わたし・私」「俺」「われ・我・我々」など、複数の自称詞を用いていることが分かった。また、男子生徒の作文の中には、一つの作文の中で複数の自称詞を使い分けることで、思いや気持ちなどを効果的に表現しているものがあることなどを明らかにした。

今後は『児童・生徒作文コーパス』の他の資料についても調査を行うとともに、今回調査対象外とした「自分」という自称詞についてどのように使われているかを明らかにする必要があると考える。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 20H01674 の助成を受けたものです。

文 献

- 今田水穂 (2020). 「『児童・生徒作文コーパス』形態論・係り受け情報データ Ver.1.6」
(2020年12月作成)
- 今田水穂・宮城信 (2020). 「学校課題作文コーパスの構築」『言語資源活用ワークショップ
発表論文集』第5巻, pp.103-113.
- 小林美恵子 (2006). 「『おれ』と『お前』の共同体—その変貌と拡大—」『ことば』27号,
pp.90-110.
- 三枝優子 (2010). 「小学生の言語意識—自称詞および終助詞を中心に—」遠藤織枝・小林美
恵子・桜井隆 (編著)『世界をつなぐことば ことばとジェンダー／日本語教育／中国
女文字』三元社, pp.169-182.
- 佐竹久仁子 (2018). 「ことばの規範とジェンダー—こどもたちが学ぶこと—」『日本語学』
vol.37-4, pp.44-54.
- 鈴木孝夫 (1973). 『ことばと文化』岩波新書.
- 西川由紀子 (2003). 「子どもの自称詞の使い分け:『オレ』という自称詞に着目して」『発達
心理学研究』14巻1号, pp.25-38.
- 宮城信・今田水穂 (2018). 「『児童・生徒作文コーパス』を用いた漢字使用能力の発達過程
の分析」『計量国語学』31巻5号, pp.352-369.
- 村田年 (2018). 「国語教科書の中の『女ことば』:小学1年生用教科書(上巻)を資料とし
て」『日本語と日本語教育』No.46, pp.45-71.
- 渡辺亨子 (2019). 「『国語教科書』はどのように自称するか:自称詞に着目した学習に関す
る一考察」『信大国語教育』29, pp.69-85.